

残された班ノート



今泉 暁美

表紙のくたびれたノートが、三十冊ほどある。この三月に卒業した生徒たちが、二年間書き続けてきた班ノートである。そこには、四十人の成長のあとが記されている。

生徒も教師も忙しい中学校生活の中で、一人ずつじっくりと話す機会はほんとうに少ない。そうした毎日、班ノートは、私と生徒また生徒同士をつなぐ大きな力となったと思う。そこから学活のテーマがきまり、昼食時の話題が生まれたこともしばしばである。

二年生のはじめには、授業や清掃の反省が同じようにかきつけられている。他の人の考えについて書いたり、自分のほんとうの気持ちもいくらか書くようになってくるまでには、半年近くかかった。そうして、班ノートについても、反省

や自覚がでてきた。

二年生の十二月ごろから、班ノートを長く書くことが流行した。内容には、創作風あり、DJ風あり、クイズありイラストありで楽しかった。が、時間がかかると、「班ノートはいかにあるべきか」という反省がでて、あまり長く続かなかった。しかし、それ以後、班ノートはバラエティに富んできた。生徒がひどく个性的になってきたと感じはじめたのも、このころである。三年生になると、学習やテストなどのことが多くなる。また反面、班ノートを息ぬきに行っている者もいる。書いた気持ちを考えると、いいかげんな感想ではすまないようなものも多くなってきた。

○ある本を読んでいて、親のいうこ

とは素直にきくようにしなければならぬんだなと感じる。その時、母が、あのかん高い声で自分を呼んでいる声がある。すると、自分は反抗的ないかげんな返事をしてしまう。せつなくいい気分だったのと思う。自分は、考えることとすることがよく違っている。それが何だといわれても困るが。

○あと何日で卒業などと、口にするようになった。毎年卒業していく人たちは、どんなことを思い、どんなことをして来たのか。人ごととばかり思ってきたのに。でも、みんなはふだんと変わりなく、大きな声で笑ったりしている。気を紛らしているのかな。なんだか、不思議に思えてくるな。腹の中がつつあばいて、見てみたい。

こんな文章のあとに書いた赤ペンの私のことばは、なんと通りいっぺんのものだったかと、恥ずかしくなるほどだ。生徒の重い心のしこりを、いったいどれほどほぐしてやることができたろうか。正面から、がっしりと受け止めていたろうか。ひとりの生徒にとつて、たった一度のその時を、職業的な慣れで、処理してしまっただけではないだろうか。

班ノートの最後に、こんなことばもみられる。

○三年間でいちばんうれしかったこ

と——この組になれたこと
三年間でいちばんばかみたいと思
ったこと——自分。

三年間でいちばん楽しかったこと
——集団宿泊訓練に学級のみんな
とあった時。

三年間でいちばん悲しかったこと
——卒業。

○先生も苦勞したでしょうね。こんな私たちを納得させながら、毎日すごしていた時「教師っていやだな。なんて思ったことありませんか。あの時どうしてもっと素直になれなかつたらう。」と反省しています。先生、これからも私たちのこと忘れな
いでくださいね。私たちも忘れませ
ん。

残された班ノートの中で、生徒たちはいつまでも語りかける。それは私に「教えること」と「人が人を理解すること」のむずかしさを、いっそう感じさせる。

今、生徒たちは、自分の道を歩みだしている。私は、にぎやかな一年生に囲まれて毎日を過ごしている。この二年間に生徒たちに教えられたものを、こんどこそ生かしたいと思いつながら。

(船引町立船引中学校教諭)